

凶器注目効果における文脈の一致・不一致の影響

— 眼球運動測定による検討 —

○前田和音・藤川真子・八幡侑樹・田村美悠・下向井愛香・金沢瑠璃子・藤井達也・古本正紀・山本岳・横井建・中嶋智史
(広島修道大学健康科学部)

目的

目撃証言の研究において、犯罪場面で凶器を持った人物を目撃した際に凶器に注目し、その人物の人相などの情報に関する記憶が悪くなる現象である凶器注目効果が知られている (Loftus et al., 1987)。この凶器注目効果のメカニズムについて、Pickel (1999) は、通常凶器が出てくることが不自然な文脈において凶器が登場する場合に凶器注目効果が起こるとしている。

本研究では、凶器、非凶器について、自然な文脈と不自然な文脈を設定し、「各文脈で凶器に対する注意の向けられ方や記憶のされ方が違うか」について検討した。また眼球運動を測定することによって各文脈で注視時間や回数がどのように違うのかについて検討した。仮説として、不自然な文脈においては自然な文脈に比べて、凶器により注目が向くと予想された。

方法

実験計画 2(文脈：勉強，誕生日)×2(凶器有無：凶器あり，凶器なし)の2要因参加者間計画で実施された。

実験参加者 大学生34名(男性13名，女性21名，平均年齢19.24歳 ($SD=1.07$))が実験に参加した。

刺激 大上他 (2006) を参考に8枚で一連のストーリー形式の静止画 (2048×1536) を使用した。刺激画像には凶器が出てきて自然な文脈 (誕生日) と不自然な文脈 (勉強) があり、いずれも2人の人物が交流する場面で構成されていた。画像のうち5枚目を凶器 (包丁) もしくは非凶器 (定規) が出てくるターゲット画像とした。

再認記憶テスト ターゲット周辺関連 (4問 (例「男性は手に持っていたものをどこに向けていましたか?」))，背景関連 (4問)，無関連 (4問) について，3択の強制選択式で実施した。

手続き 眼球運動は Tobii TX300 を用いて測定した。キャリブレーションを行ったあと，いずれかの条件を呈示した。各刺激は6秒間呈示した。刺激呈示が終了した後，遅延なしで記憶テストを実施した。記憶テストは偶発学習で実施した。

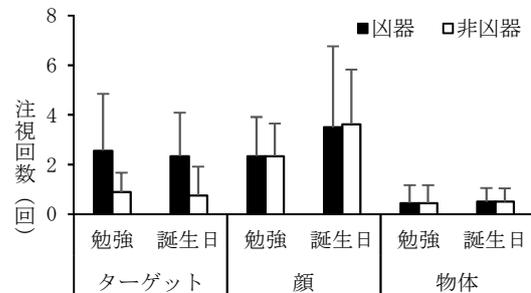


Figure 1. 各項目における総注視回数の平均値。

分析 3箇所 (ターゲット (凶器，定規)，顔，物体) の関心領域 (AOI) を設定し，総注視時間と総注視回数を算出した。眼球運動が適切に測定できていなかった勉強凶器条件1名，誕生日凶器条件1名のデータは除外して32名で2(文脈)×2(凶器有無)×3(AOI)の3要因ANOVAを実施した。

結果と考察

総注視回数 AOIの主効果が有意であった ($F(2, 56) = 17.77, p < .001$)。また凶器有無×AOIの交互作用が有意傾向であり ($F(2, 56) = 2.65, p = .08$)，下位検定より，ターゲットのみで凶器の方が非凶器よりも注視回数が多い傾向にあった (Figure 1)。

総注視時間 文脈×AOIの交互作用が有意であり ($F(2, 56) = 5.20, p < .01$)，顔のみで誕生日の方が勉強よりも注視時間が長かった。

再認記憶 正答率を従属変数とした2(文脈)×2(凶器有無)×3(対象)の3要因ANOVAの結果，凶器有無の主効果が有意傾向であり ($F(1, 30) = 3.01, p = .09$)，非凶器条件よりも凶器条件の正答率の方が高い傾向にあった。

総注視回数の結果より，非凶器条件に比べて凶器条件の方がターゲットにより注意が向く可能性が示唆された。また，記憶テストの結果から，凶器の主効果のみが有意傾向であり，本研究の仮説は支持されなかった。従って，凶器に対する注意の向け方は，必ずしも文脈によって変化しない可能性がある。ただし，本研究では，各条件のサンプルサイズが小さく，また条件間で記憶テストにおける問題の難易度が異なっていた可能性があるため，更なる検討が必要である。